

シンパシー

天野ミキテル

彼女は誰よりも人の側にいた。それは物理的な距離の意味だけではなく、もっと精神的な意味でだ。彼女は私のご近所さんで別になんら特筆すべき点は無いただの中年女性だ。しかし、私がここに文字として記録する以上何もないで済ませることはない。彼女にはある一つの奇妙な点があった。

それは彼女が異常に好かれることだ。それだけだと至つて普通のことと思われるかもしれない。会社であれ、学校であれ誰かひとりくらいはいるだろう。しかし、誰からも愛される人などあり得るだろうか？私は、人と人の関係は鍵と鍵穴のように感じる時がある。一つの鍵穴を廻せる鍵は裏を返せば、他の鍵穴を廻せない。もし廻せたとしたらそれは鍵の意味を否定することとなるだろう。つまり、誰かに好かれる人は必ず一人くらいは誰かに嫌われる。しかし彼女はいくつものスペアキーを持っているかのように入る心のドアを開けてしまうのだ。

それ自体はなんら問題ない。むしろ歓迎すべきことだろう。人は常に誰かに扉を開けてもらうことを望んでいる。友人、恋人、家族だれだってかまわない。そのため、多くの人は疑問を持たなかつた。もつてもどこか心の奥深くで封じてしまつただろう。

しかしながら、私の作家としての本分がそれを良しとしなかつた。

しばしの間観察してわかつたのは彼女が人の気持ちを本当に理解しているということだ。気持ちを理解する、とは一見簡単そうに見えて生易しいものではない。なぜならば人は自分中心の世界にしかい

ないからだ。あくまで自分の感覚で物事を理解することしかできない。それに加えて人は決して他者にはなれない。人のことを考えたとしてもそれは自分をベースにした他者であって、実際は目の前の他者すら見てないのだ。人の心のドアを開けられない

鍵があるのも当然だ。天才と愚者の見える世界は根本的に違うのだからその相手が自らをベースにした相手と食い違う。その食い違いが時にいざこざを起こし、不仲を生む。ある意味、人は本質的に「自己中心的」なのかも知れない。

ただ、その法則は彼女には当てはまらなかつた。彼女は私と同じように泣き、同じように笑うのだ。時として自分は心の中をレントゲン検査のように見透かされているのではないか、とさえ感じるときさえあつた。とにかく彼女は心のドアを開ける達人であつた。

異変に気付いたのは、まだ残暑が残る九月のこと。

それだというのに、彼女は厚着であつた。それは些細な事実に過ぎない。しかし、それが何日にも渡れば話は別だ。その違和感はある形ある推測として私の中に生まれた。

彼女には年老いた父親がいる。私も幾度かは面識あつたのだが、最近寝つきりになつたらしい。彼女はかなり献身的に介護を続けていたそうだが、活動的だつた父親にとつて寝つきりは大変ストレスがたまるだろう。それがこうじて娘に暴力を、というのもあり得ない話ではあるまい。

私は彼女にさりげなく問いかけた。すると彼女は不安を少し混じらせた声で「違います。」とだけ答えた。いつもの明るい彼女を見慣れた私からしてみれば何かの異常があるのは明らかだった。

私は軽く怒りを覚えた。確かに他人のことは考えられないかもしない。しかしながら、涙を見れば悲しんでいることはわかるし、傷をみれば痛がつていてことぐらいわかる。いくら精神を摩耗しているかと言つてこの行動が何をもたらすかぐらいはわかるだろう。それすらも自制できないのは呆れてものも言えない。いつか会つた時にでも文句の一つや二つを言つてやろうと思つていた。

しかし、言い出す間もなく彼女の父親が亡くなられた。首を吊つて自殺したらしい。以前からその傾向は見られたらしく、確かに右腕には生々しい傷跡が残っていた。これも精神の摩耗の結果なのだろう。何もかも傷つてしまわなければならぬ程傷つ

いた彼は、最後に自分を最大の傷害でもつて終わらせたのだ。私は人格者だった頃の彼を振り返り、少しその境遇と結果に哀れとも思い同情もしていた。しかし、彼女が新しい未来を歩めることへの安心の気持ちの方が強かつた。

だから、彼女が後を追うように亡くなつたのには驚いた。死因も同じ窒息死で突然倒れたという。

それにしても、なぜ？

彼女は自殺とも他殺でもない。彼女は何に殺されたのだろうか？

ふと、彼女の右腕を見た。そこに回答が隠されていた。

彼女の腕には父親の傷と寸分違わぬ傷があつたのだから。

つまり、彼女は誰かの悲しみを正に自分の悲しみとし、誰かの傷を自分の傷とする人で、誰かの鍵穴に合わせる鍵でなく合わせられる鍵だったのだ。

彼女には父親の他に身寄りがなく、一番交流が深かつた私が遺品の整理をすることになった。それをしている最中、少し考えた。彼女の、あの献身的な態度は他者のことを考えた故だとおもった。しかしながら、彼女は自分が傷を負うのがいやだからではないのか。もしそうだとしたらどんなに人のことを分かっていたとしても自分のためにしか生きられないのではないだろうか。

筆筒の裏から手紙が落ちる。どうも父親の遺書らしい。

「前略

私が寝つきりになつてからというもののお前にか

なりの負担をかけさせてしまつた。前はこの世に未練があつたのか死にきれなかつたが、お前の腕の傷を見た今、自殺を決意した。止めてくれたお前には多大な迷惑と悲しみを与えることに謝りたい。お前が幸せな人生を送れることを祈つてゐる。」

私は作業を中断することにした。外で煙草をくわえながらぼんやりと考える。

つまるところ優しさが、善意が彼女を殺したのだ。彼女の幸せを願う父親と自分の幸せを望んだ彼女のどうしようもない行き違い。

煙草の煙が空に向かって一直線に伸びていく。それを見ながら、ふと思つた。煙草は善悪のどちらかと言えば間違이なく悪だ。自信の快楽のために周りに害を撒く。しかし、善意が人を殺すのなら、惡意が人を救うこともあるかもしれない。私の知らぬところで誰かが私のまき散らした害を尊んでいるかもしれない。

もつとも、私にわかるのは一時の快楽だけだった。